

# 届け 世界の果てまでも

令和2年 6月30日

No. 16

文責 校長 飯久保一男

## 自立への第一歩

自分で自分のことを決められない若者が増えているといえます。大学を選ぶときや就職・結婚のときでも、親が口を出し、親が決めるケースが増えているそうです。

大学…大学のオープンキャンパスというのは、本来は、高校生が大学を見て回って、模擬授業を受けるなどをして「どこの大学が自分に向いているか」を体験する機会です。ところが、相談コーナーでは、子どもはほとんど無言で、親のほうが一生懸命に「うちの子はこういう子で、だからこの大学がいいと思って」とひたすらしゃべるそうです。親が極めて熱心で、子ども自身はそれほど積極的ではない、こんなケースが増えているといえます。

就職…子どもに任せておいたら、ろくな企業に行かないだろうということで「本当にその会社大丈夫なの？ どんな会社なの？」と口を出し、ほとんど親が就職活動の中心であるかのような役割を果たしていることも多いそうです。最近では、さすがに面接などに親が出ていくと採用されないのではと控えていても、入社した後に、親がどんどん子どもの会社に連絡をしてきて、上司に絶えず連絡を取っているというケースもあるといえます。

結婚…結婚となると、さらにその傾向は強いようです。放っておいたら、いつまでも恋人もつくらない、結婚できるのだろうかと悩んでいる親は多くいます。今、親が中心の子どものための婚活（結婚するための活動、結婚活動の略）パーティーが行われているといえます。つまり、子どもの婚活パーティーに親が自分の子どもの写真を持って参加するのです。

子どもは、いつから自分の判断で自分の進むべき道を決めるのでしょうか。

子どもは、大人として扱えば、だんだん大人に成長していくものです。しかし、周りの大人が子ども扱いをしていたら、いつまでも子どものままでいるものです。人はラクなほうに流されます。大人になるよりも、子どもでいるほうがラクなのです。その甘えを親が引き受け、一つ一つのことに関わり、口を出していると、子どもはいつまでも自分で判断ができないままです。これでは自立につながりません。

子どもの成長の途中で、手や口を出したいときに、じっと我慢をすべき時期があります。しかし、いきなりそれをやるのは無理があります。それまで全部手を出し、口を出していたのを急に「自分のことだから自分でやりなさい」とされても子どもは困るだけです。小さいうちから「自分のことは自分で決めさせる」必要があるのです。何でも親が決めて、自分で選ぶ力を親が奪ってしまう…、そのツケはいつか回ってきます。

そもそも「自立」とは、どういうことを指すのでしょうか。広辞苑には「他の援助や支配を受けず自分の力で身を立てること。ひとり立ち。」とあります。「自立」と聞くと「自分のことは自分で」「自分でお金を稼いで生活する」といったイメージがあるかもしれませんが。確かにこれも、自立のひとつの定義ですが、「子どもの自立」は少し意味が違ってきます。

両親や祖父母や兄弟などの家族、教師、地域の人、友人など、さまざまな人たちに支えられてこそ、人は生きられます。自分の力だけでは生きていけません。このことから、「子どもの自立」とは、「自分ができないこと、助けてほしいことを、素直に人に言えること」ともいえるのです。



逆に考えると、子どものうちに「自分のことは自分で決める」経験をさせて、**たくさんの「困る経験」を重ねることが大切**であるといえます。そして、自分が困ったときに、困っていることをきちんと伝えて、助けてもらい、助けてもらったなら、感謝を伝えること、これが大切なのです。それが自立へとつながります。

ところが、子どもが忘れ物に気づく前に、親がランドセルの中身をチェックして、「リコーダーを忘れていたから入れといたよ」と子どもがすべきことをやってしまう…、習いごとへ通うのに親の運転する車で行き来し、子どもはお客さんよろしく、車内で悠々とゲームをしている…など、子どもが困らないよう何かにつけ先回りし、お膳立てをしてしまう…、これでは「自立」につながりません。

**自分でできることは自分でさせる、たくさんの「困る経験」をさせる、**その中で、**必要なときに「助けて」と言えるようになる**ことが、子どもの自立への第一歩だと思うのです。



※参考 「自分がない大人」にさせないための子育て (諸富 祥彦:著)  
脳科学からみた男の子の「ちゃんと自立できる脳」の育て方 (成田奈緒子:著)

### 助けてもらうといえば… つぶやきをちょっとだけ…

3月の終わりに小笠原小学校に来てから今日まで、本校の教職員には「いつも&とても」助けてもらっている。学校教育法37条には、学校の教職員のそれぞれの職務が記されている。3つの職のみを抜粋すると…

- ④校長は、校務をつかさどり、所属職員を監督する。
- ⑦教頭は校長を助け、校務を整理し、及び必要に応じ児童の教育をつかさどる。
- ⑨主幹教諭は、校長及び教頭を助け、命を受けて校務の一部を整理し、並びに児童の教育をつかさどる。

そこには教頭・主幹教諭の職務として、「校長を助ける」ことがその職務の最初に明記されている。これを校長からの「Iメッセージ」にして書き直すと「校長は、教頭・主幹教諭に助けてもらって…」となる。そう。校長は、教頭や主幹教諭に「助けてもらう職」(語弊あり)でもある。

…本校は、2年前まで教頭が2人配置の学校だった。児童数が南アルプス市で一番多い小学校で、教頭の仕事が非常に煩雑であったからである。今は、若草小の児童数が一番多くなったので、若草小が教頭2人配置の学校になったが、それを1人でやっている本校の教頭はとても忙しい。どこの学校でも教頭は忙しいのに。

…山梨県では本校のように児童数の多い学校には、主幹教諭が配置されている。私が昨年度勤務していた大明小には、主幹教諭は配置されていない。大明小では職務上、校長を助けてくれるのは教頭1人だけだが、小笠原小では、教頭と主幹教諭の2人に助けてもらえる。

校長を助けるとされている職が2人もいるのは心強い。しかも、佐野教頭は以前に本校の勤務経験があるし、松田主幹教諭は本校6年目。2人とも本校のことをよくわかっているのだから、二重・三重に心強い。私は地元に住んでいるが、楡形地区に勤務するのは初めてなので本当に助かる。もちろん、職務として明記はされていないが、とても優秀な本校教職員にも、「いつも&とても」たくさん助けてもらっている。



校長の職務「校務をつかさどる」とは「学校の業務に必要な一切の事務を掌握し、処理(調整・管理・執行)する権限と責任をもつ」とことと記されてもいる。以前にも書いたように、教職員の仕事は多岐にわたる。それを1人でやるにはスーパーマンにでもならなければならない…。前述の「子どもの自立」と同じで、本校は、校長も教頭も、すべての教職員が、「チーム小笠原小」として、お互いに助け合い、お互いに感謝しながらここまでやってきている。

さらにそこに、保護者の皆さんや地域の皆さんの助けがあれば「**鬼に金棒**」です。